

山田智彦

クレムリン銀行



クレムリン銀行



山田智彦



クレムリン銀行

昭和五十四年十月三十日 初版発行

著者 山田 智彦

発行者 角川 春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見二の十三
電話 東京(三六五) 二二〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社 宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

クレムリン銀行

装幀・福田隆義

プロローグ

シンガポールの中心街、オーチャードロードのほぼ中心地と言ってもよい、三三三番地に、周囲の高層建築を圧するようにそびえ立っている白壁の建物がある。

四十階の高層ホテル、ザ・マンダリン・シンガポールだ。

このホテルは、たんに高層であるばかりでなく、設備も料金も超一流である。しかし、南国情緒豊かな、優雅で格調の高い雰囲気^{ふんいき}を、世界中から集まってきた宿泊客たちは十分に堪能^{たんのう}しており、その限りにおいて、宿泊料金が問題になることはなかった。

たしかに、ザ・マンダリン・シンガポールはすばらしいホテルであった。

格式と伝統を誇る名門、ラッフルズ・ホテルや、広大な敷地とジャングルガーデンの魅力を満喫出来る、新興シャングリラ・ホテルと並んで、シンガポールの象徴と言っても過言ではない巨大ホテルである。

おそらく、シンガポールの住人で、ザ・マンダリン・シンガポールを知らぬ者はいないだろう。

だが、ある年の夏のさかり、八月一日、火曜日の夜、このホテルの最上階回転レストランで催された非公式のパーティについては、知らぬ人の方が多かった。

当然のことながら、その夜、遠くインドネシアやマレーシアの島影を眺めたり、東シナ海を航行する船の灯に思いを馳せたりした人たち、三百六十度のパノラマを愉しみながら、ワインの逸品を飲み、世界各国から集められ、選りすぐられた料理を賞味した人たちの数は、そう多くはなかった。

この、たかだか二百人たらずの人たちの大半は、当シンガポールやマレーシア、インドネシア、タイ、フィリピン、香港など、東南アジア各地に拠点を持ち、各国政府の中枢部にくい込み、その知恵とヴァイタリティと、あくなき商魂によつて今日の地位を獲得した華僑たちであった。

が、それは、別に驚くにはあたらない。シンガポールの総人口の七十五パーセントが華僑であつてみれば、中国人たちの公式、非公式のパーティがあちこちでおこなわれるのは当然であると言えよう。

しかし、この夜の非公式なパーティの主催者はロシア人であつた。

クロフォード棧橋に近いバンク街の一角、セントンウェイの表通りに十六階建の大ビルディングを建て、アジアダラーのマーケットに参加した、クレムリン銀行の総支配人が、当夜の、真の花形であり、多少うがった見方をすれば、影の演出者であつた。

ナロードニイ・クレムリン銀行は、ロンドンに本拠を置く、ソ連の多国籍銀行であり、長い伝統と堅実な経営を誇り、資本主義陣営に互角の戦いを挑む名門銀行である。

ユーロダラー市場では、かなりの勇名を馳せており、通貨不安が日常茶飯事になった昨今では、例のチューリツヒの小鬼たち、スイス銀行やシティの小鬼、ロンドンのバンク街に集っている世界中の銀行の出先支店、営業所などを圧倒する動きを見せている。

とくに、ここ数年のクレムリン銀行の活躍ぶりには目を見張るものがあつた。金融機関経営者たちの

なかには、フランスの名門、クレディ・リヨネ、西独のあくなき業績推進車、コメルツ・バンク、イタリアの俊英、バンコ・デ・ローマをしのぐ業績の向上に、啞然とする者さえ出ている。

もちろん、こうした、クレムリン銀行の活躍の背後には、モスクワ政府やソ連国営の巨大銀行ゴス・バンクの強力なバックアップがあった事実はいない。

そして、このバックアップには、ソ連の石油戦略やヨーロッパ、中近東、アフリカ、東南アジア等への足がかり、いわゆる海を求めての進出である世界戦略への切実な野望がたくされていることもまた、事実であろう。

クレムリン銀行はまず、ベイルートへ進出、次いで、一九七一年には、マラッカ海峡の喉もとを押える、当地シンガポールへの進出を果たした。

以来、ほんの二、三年の間に、このソ連銀行は驚くべきことをやってのけた。

磐石の強みを誇る地元の中国銀行、イギリスの大手、チャタード・バンク、アメリカ第二位の、と言うことは、世界第二位の巨大銀行であるシティ・バンク、屈指の世界財閥銀行であるチェイス・マンハッタン、日本の強豪、三井銀行をはじめとする各銀行、アジアダラーマーケットに参加する八十四行中の、文字通り、トップ銀行にのしあがったのである。

社会主義国のソ連の一銀行が、預金量の増強、融資客の拡大、外国為替相場での大胆な資金運用等によって、西側諸国のヴェテランバンクマンたちを、手もなく出し抜いたのである。

これが、離れわざでなくて、何であろう。

さて、その立て役者、シンガポール常駐のクレムリン銀行総支配人兼支店長、グリゴリー・ダニイ

ロヴィッチ・ポヌイリヨフは、いま、その大柄な軀^{からだ}を敏捷^{びんしょう}に動かして、人々の間を泳ぐように歩いていた。

彼はまだ五十代の半ばにしかならぬ、偉丈夫^{いじょうふ}と言ってもよい大男で、身長、体重ともに周囲を圧倒していた。血色のよい顔色といい、人当りのよい陽気な性格といい、ロシア人というより、アメリカ人と言った方が、通りがよさそうであった。実際に、ポヌイリヨフの青い眼と金髪、たて縞^{じま}のカラーシャツと派手な原色の混じったネクタイを眼にすると、スラブ民族の一員というよりは、アングロサクソンの末裔^{まつがい}であるヤンキー気質まる出しといった感じであった。

ポヌイリヨフが人々の間を大股^{おおまた}に歩きまわっては愛想をふりまいているのに対して、クレムリン銀行シンガポール支店次長兼事務部長のニコノール・アレクサンドロヴィッチ・リムスキイは、時折、微笑を浮かべながら、ワイングラスを片手にゆっくりと会場を移動していた。

彼は背が低く、小肥^{こがと}りで、酒飲^{さか}みらしく、赤ら顔をしており、年齢も、ポヌイリヨフより十歳ぐらい上に見えた。頭髪は赤褐色^{せつかつしよく}でかなり薄くなっており、後頭部は殆ど禿^{はとん}げあがっていた。見た眼にはもちろん、あまり活動的とは言えず、むしろ愚鈍^{ぐどん}な印象さえ与えかねなかった。もちろん、躍進するクレムリン銀行のナンバー2というイメージからはほど遠かった。しかし、笑顔になると、たちまち人の好さそうな童顔^{どうがん}になって、相手をほっとさせた。ビジネスの世界では、こうした暗黙の、まるでジェスチャーであるかのような素顔の露出が思わぬ効果を生むものである。

クレムリン銀行のもう一人のスタッフ、融資部長のミハイル・ニコラエヴィッチ・ボソイは、前二者とはかなり異なつた風貌^{ふうぼう}をしていた。身長はポヌイリヨフとほぼ同じくらい高いが、おそろしく瘦^やせて

おり、面長の顔の頬もこけている。頭髮は東洋人のように黒く、顔の色はやや病的に青白かった。

にこりともせず、顔をしかめたまま、はじめからパーティ会場の一角に、ひよろ長い一本の木のように突っ立ったきりであった。

融資部門の最高責任者であるため、酒の入ったパーティになっても、ことさら固い表情を崩さないでいるのか、あるいはまた、貸金の行方が気になってならぬのか、そのあたりの真相はわからなかったが、とにかく、終始、他人が挨拶をせぬかぎり、出来のわるい仮面をかぶったように、表情が動かなかった。その他にも、シンガポール駐在のソ連大使や、一、二等書記官、大使館員など十数名のロシア人たちが眼についていた。

シンガポールに進出しているアメリカやヨーロッパ各国の銀行や一流企業の経営者たちの姿も多く、マレーシア、インド、インドネシア、エジプト、サウジアラビアなどの人たちの姿とあいまって、国際色豊かな、親睦パーティにふさわしい雰囲気盛りがあがっていた。

その時、遅れて、せかせかせした急ぎ足で会場に入ってきた一団があった。

ダークスーツに身を固めた、小柄で、前かがみの猫背のために、すぐにそれとわかる、十名ほどの日本人である。

入口に近いテーブルで、ウイスキーの水割りを片手に、たつぷりレモンをかけたキャビアをほおばっていた、日比野卓雄はその顔ぶれを見て緊張した。

日比野は、富民銀行のシンガポール支店長をしていた。彼はシンガポールに進出している日本の大手銀行中、ただ一人の三十代支店長であった。

と言つても、あと数か月後の誕生日を迎えると四十歳になる。

彼はいま、富民とは互角の競争相手である大手都市銀行の一つである友井銀行の頭取、馬場龍一郎の姿を見かけたのである。

白髪をきちんと七三に分けた馬場は、老いたりとは言え、眼光鋭く、鬢鏤かんしやくとした足どりで、供の者を従えたまま、まっすぐにポヌイリョフ総支配人の前へ進んで行った。

日比野卓雄は料理を物色するふりをしながら、歩きはじめ、いますこし一行に近付いた。

案内役は日比野もよく知っている友井銀行シンガポール支店長の北園良造きたぞうりょうぞうであった。実直で、真面目な男であり、ごま塩頭のために、実際の年齢より数歳老けており、五十代の半ばぐらいに見えた。

馬場のまわりにいる数人は、おそらく頭取護衛のために東京からくっついてきた連中だろう。クレムリン銀行と友井銀行は従来何の関係ももっていなかった。それなのに、どうして馬場頭取がこんなところにあられたのだろう。

厭いやな予感がこみあげてきて、日比野は緊張した。彼は、一行に背を向けながら、すばやくいくつかのケースを想定してみたが、どれもみなしっくりしなかった。

ポヌイリョフは馬場と握手をするとすぐ、かたわらにいた太った中国人の肩を抱くようにして、馬場に紹介している。近頃めきめきと頭角をあらわしてきた華僑の大物実業家、啓伝虎けいでんこであった。

「うーむ！」

と日比野はかすかに唸うなった。

「ポヌイリョフ、馬場龍一郎、啓伝虎」

と彼は口の中で呟いた。何かがすでにはじまっているような気がして、日比野は一瞬呼吸を止めた。次の瞬間、彼は大きく息をついて、取りこし苦労かも知れないが、やはり、東京へ知らせておくべきだろうな、と思った。

と、彼は、一行から少し離れて、自分と同じように日本人グループの様子を窺っている、ダンディな身なりをした中年男を発見した。

「なんだ、丸岡広明じゃないか」

今度も彼は低い声で、呟いてしまった。

1

友井銀行赤坂支店長の白石浩一^{しろいしこういち}が、広南^{こうなん}物産の若手部長丸岡広明の、香港からの国際電話を受けたのは、真夏の八月十日であつた。

シンガポールのホテル、ザ・マンダリン・シンガポールの最上階での、クレムリン銀行主催パーティーの、ちょうど九日後である。

「とにかく、至急会いたいんだ！」

挨拶^{あいさつ}のあと、丸岡は性急な口調で言つた。

「ぼくの方より、むしろ、きみの方の仕事と言うか、きみ自身のためになる話だ。まだ夏休みはとつてないんだろ」

「忙しくて、休暇どころじゃないですよ」

と白石は用心しながら答えた。

「ちようどよかつた、すぐ香港へ来てくれ、今日は木曜だろ、金、土の二日休めばいいんだ。本社の秘書をやるから、パスポートだけ今日中に渡しておいてくれ。明日の十時過ぎのシンガポールエアールインズをおさえておいた。航空券やホテルの手配は全部こつちでやっているから」

「いくらなんでもそれはひどいですよ」

白石は思ったままを口にした。

日頃から何かと引きたててくれている大学時代の先輩でも、ちょっと話が急すぎる。銀座まで出てこいと言うのとはわけがちがう。近いとはいえ、香港は外国なのだ。

それに、白石は例年五日間ある夏の特別休暇を取ったことがなかった。今年ももうだめだとあきらめていた矢先であつた。

丸岡の話であるかぎり、友井銀行にも、白石自身にもプラスになるであろうことはまずたしかであつた。いままでの例からして、丸岡が性急に、押しつけがましく出てくる時ほど、こちら側のメリットが大きかつた。

「いまぼくは香港を動けないんだ。ひどいかひどくないかは、あとになってよく考えてみてくれ」丸岡のきつい口調のなかには、彼の自信のほどが顔を出してきている。

「それはわかりますよ、丸岡さんにはお世話になりっぱなしだし」

白石はすでに半分以上、丸岡の誘いに乗りかかつていた。彼は直感で、丸岡の話の大きさをはかろうとしていた。白石は今週末のスケジュールをすばやく検討した。調整は可能であつた。日本の夏の、とくに今年の記録破りの暑さから、ほんの二、三日でも解放されたいという欲望が頭をもたげてもきた。

「銀行はね、商社さんと違って、幹部社員が外国へ出掛けるとなると、うるさいんですよ。たとえ二、三日でも、人事部長に届けて、担当常務の了解を……」

言訳がましい口調になった。

「そんなことはわかってるよ。今回はね、馬場頭取が承知しておられるんだ」

「馬場頭取が！」

「話は会ってからするが、銀行には内密、きみは週末に二日休暇をとって田舎へ帰った、それでいいじゃないか、日曜の夜には成田に着いているよ」

「……………」

白石は、一瞬、押し黙ったが、結局自分はいかざるを得ないだろうと思った。

「明日の午後には会えるだろう。カイトク空港へは迎えに行く」

用件はすんだとばかり、丸岡は挨拶なしで電話をきってしまった。

数分しないうちに、広南物産の東京本社、部長付秘書から電話が入った。

さらに、数分後に、丸の内にある友井銀行本店、頭取秘書室から電話が入ってきた。

「白石支店長さんですか」

という確認があったあと、受話器を手渡している気配が感じられたので、白石は緊張した。はたして、馬場頭取の声が聞こえてきた。

「ああ、白石くんか、ぼくの部屋へ来てくれ」

すぐに受話器を置く、ものをぶつけたようなにぶい音が、彼の左の耳朶を打った。

白石は内線番号をまわし、運転手を呼んで車を出させた。十五分後に、彼は丸の内に着き、十六階建ビルの最上階へ上った。

皇居に近い巨大なビルの十六階全部が頭取をはじめとする役員室になっていた。白石は役員専用の急

行エレベーターで、一気に最上階まで登ってきた。

エアコンデিশョンがゆきとどいていて、外の暑さはまるで嘘うそのようだ。白石は、廊下の窓から強い陽ひざしをあびているお堀の水を見下ろした。濃緑色の水の表面だけがきらきら光っている。

彼は一息つき、役員室の入口にある秘書課の受付へまわった。

顔見知りの秘書嬢に頭を下げると、

「お疲れさまでした、ご案内します」

と言われて、役員応接室へ入れられた。

五分待たないうちに、呼び出しがあり、彼は頭取室の扉とびらをノックした。

正面の大きな机に向かっていた馬場頭取は、書類から眼をあげてこちらを見た。鋭い眼まなこざしを全身に浴びて、白石は入口から数歩のところで立ち止ってしまった。

頭取の馬場龍一郎は、小柄だが、気品のある顔付をしており、銀白色の髪をきちんと七三に分けていた。眼付が鋭いのと、鼻の先がユダヤ人のように尖とがっているので、冷たい感じを与えがちであった。そのため、笑顔になっても、どこことなくよそよそしさがなくならず、頭取の笑顔はほんものではない、いつも眼が笑っていない、という陰口がかわされていた。

白石はいま、あらためてじろりと睨にらみすえられたような気がして、あの噂うわさはやはりほんとうであったと思った。

「まあ、かけたまえ」

と頭取はソファアを指さした。

その時、ノックの音が聞こえて、失礼いたします、という涼しい声とともに、女性秘書が冷たい麦茶を運んできた。

「きみの店は、なかなか成績がいいようだな」

ソファーで向かいあうとすぐ頭取は言った。

「おかげさまで、部下がよく働いてくれるものですから」

と白石は頭を下げた。

「きみの経営手腕が、まあ、いまのところは当たっているんだろう。しかし、これが、ほんものかどうかは、まだわからんなあ、これからのきみの働きぐあいによってきまるところがね」
にこりともせずになんと言うと、

「飲みたまえ！」

顎^{あど}をしゃくって、麦茶のコップを示した。

「いただきます」

と言って、白石は冷えたコップを手にとった。

「今日きてもらったのは、若いきみにばりばり仕事をしてもらおうと思つてな」
そう言うとはじめて、馬場はかすかに頬^{ほこ}を綻^{ほころ}ばせた。

「はあ！」

白石は三分の一ほど中身の減ったコップをテーブルの上にもどした。

「シンガポール支店長をきみにやって貰^{もら}おうと思つている。現支店長の北園くんもわるくはないが、